

きものに観る日本の文化

青梅きもの博物館館長 鈴木 啓 三

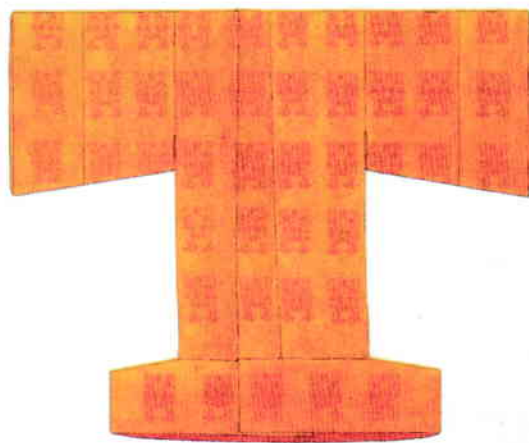
きものは、平安時代以来長い期間に花鳥風月といった優美な自然と四季の移り変わりの中に深い関わりを持ち、日本特有の色と文様で精好自在に日本の美しさを作りあげてきました。

青梅きもの博物館では、三月～四月までは源氏物語等に見る「皇室衣裳展」を、五月～七月までは町民文化の華開いた江戸時代の武家姫君の打掛、小袖をはじめ町家・豪商の衣裳を中心とした「時代衣装展」を、八月～九月までは中国(清朝)の宮廷服から中央アジアの衣裳の「シルクロード展」を、十月～十一月は江戸時代の大名家・町家・豪商の花嫁衣裳の「婚礼衣裳展」を、数か月ごとに展示を取り替えて見ていただいております。

そして、それぞれに特徴があり、その文様(柄)ひとつ取ってもそれぞれの伝統を尊重した先人の英知を感じます。

そもそも、「文」は入墨を意味し、文様を意味する「柄」も、鳥

皇室1 桐竹鳳凰麒麟文 袍



の骨の事を「鶏がら」と言う様に、語源は骨でありました。すなわち一族一門を表す意味として使われており、きもの文様がただ単に美しく描かれてきたものではなく、深く意味がある事が察せられます。それぞれの国においてその特徴を持つ文化は平和な時代に成熟すると言われています。日本では

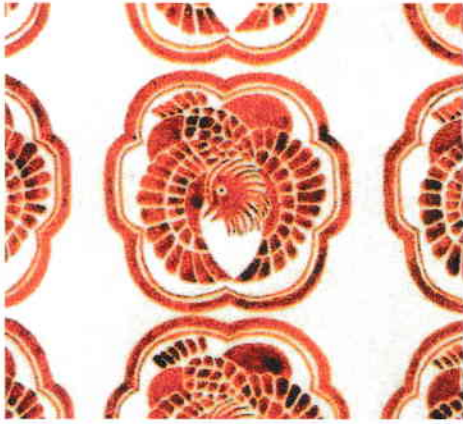
三百五十年続いた平安時代、源氏物語に代表される貴族文化が華をさかせその装束は現在皇室にまた女子の節句、雛祭りに見る事ができます。

皇室の文様を「有職文様」といい、有職の語源は有識、すなわち知識が有るという事であり、人によって、時と場所に依じて着装する衣服や文様に違いがあり、先例典故の知識に精通しているという事です。

天皇陛下が即位式に着用される束帯(袍)の文様が、桐竹鳳凰麒麟文で、霊鳥である鳳凰は、平和な時に現れ桐の木に宿り竹の実を食すと言う中国の故事の意の如く、

鳳凰の到来は平和の訪れを意味しており、その束帯の色が黄櫨染、太陽の色を表し、天皇陛下しか着用できない色であり文様です。皇太子様の文様が紫に、鴛鴦の(おしどり)に、黄丹、昇りゆく朝日の色を意味しております。

また常陸宮様はじめ皇族は雲鶴文(鶴)で色は黒です。皇后様の十二単には、鳳凰丸や向鸚鵡、松喰い鶴文等で一昨年の上上天皇即位式に雅子皇后様は向い鶴が使われており平安時代より続く皇室の文様には「鳥の文様」が多いのです。これは、「空を飛ぶ事の出来る鳥は神の使い」と考えられ、神社の入り口には「鳥居」が立ち、サッカーでおなじみの日本チームのマークが三本足のからす(八咫鳥)は、古代中国では、鳥は太陽神を意味しています。この様に鳥は神の使いと考えられ皇室の文様に多いのです。これは日本ばかりでなく、アジアをはじめ世界各国で見られます。韓国では雉が天と地を結ぶ使者であり、古代オリ



皇室2 窠に鴛鴦の丸（おしどり）

皇太子の御袍の色は朝日を意味した黄丹で文様が窠に鴛鴦の丸（おしどり）おしどりは雌雄一対で仲むつまじい事から正統性をも意味し正倉院御物にも多く見られる文様

段の衣服の文様はどうでしょうか。弊館には孝明天皇の姉君で十四代將軍徳川家茂公と公武合体のため結婚した和宮親子内親王の姉君でもある桂宮淑子内親王様御着用の小袖・帷子をはじめ、明治天皇の内親王様が御着用された衣裳が所蔵されておりその衣裳に多く使われている文様は折枝文様です。折枝を文字の視点から見ると、とりわけ古典の記載される折枝とは一般的には簪として頭に挿す「挿頭」（かざし）であり挿頭にはもともと生花、それも祭りの場で生えている草花を



エントのゾロアスター教の神は鷲に乗って天空を飛び、エジプトでも生命の記号「アネク」を運ぶハト、

ベルシヤの鳥崇拝が花喰鳥のもと昨鳥文を生む、などです。内親王妃はじめ皇女の方々の普

皇族（親王）の御袍の色は黒で文様は雲に鶴の雲鶴文、吉祥文である。瑞雲に鳥類の王である瑞鳥 鶴の文様



皇室4 大正天皇即位式にて
梨本宮伊都子妃殿下御着用 五衣小袿



皇室3 大正天皇即位式にて
梨本宮守正王殿下御着用 衣冠

皇室5

白麻地鳳凰花折枝文様刺繍帷子
桂宮淑子内親王御着用



皇室6
紅縮緬地ハツ藤菱菊梅折枝文様刺繍祝着
明治天皇内親王御着用



折枝文様
内親王様が着用される小袖に多く見られる折枝文様

使用することから樹霊との交流を得て生命力を強化しようとする一種の呪術的な行為とされたようです。少しでも老いを無くし若くありたいとまた植物の持つ美しさを受け美しくありたいと望む現在の女性にも通ずる願のように感じられます。そして次に平和が続いた時代は二百五十年続いた江戸時代です。この時代は歌舞伎に代表される町人文化が華をさかせました。そして江戸時代の衣装には現代に通ずる文様が見られます。吉祥文様と聞くと「松竹梅」と答える人が多いですが、この松竹梅、「元来、「歳寒三友」と言い、中国渡来の文様でした。松は葉緑樹であり寒い冬でも葉色を変えぬ事か

武家7
白綸子地登鯉亀松竹梅摺疋田繡打掛
武家婚礼 伝、水戸徳川家姫君着用打掛



鯉は瀧を登って竜に成る立身出世を意味する登竜門の故事
私と結婚する殿様ますます出世する

と梅の木が植えられています以上のように風雪の寒さにも耐える松竹梅を歳寒三友と名付けたのです。

これが、婚礼の衣装に使われるようになったのは江戸時代、それも日本だけです。松竹梅とは、松は「待つ」に、竹は竹取物語に見るかぐや姫、す

ら心変わりをしない、竹は節がある事から風雪に耐える目上の者目下の者にも節をもつてまた梅は雪が残る春に先駆けて花を咲かす事から目出度いとまた別名、好文木とも呼ばれ学問の神様天満宮へ行く

武家8
黒綸子鶴鼓鶏松竹梅鶴亀文様摺疋田繡打掛
武家婚礼



閑古鳥（諫鼓鶏）の文様は中国の故事「諫鼓若むして鳥さわがず」より平和を意味した私の結婚する殿様の国は平和ですという最高の文様

武家9
濃茶縷子地花束団扇瑞雲七宝繫文様打掛

この衣裳は大奥で上誦(官位の高い人)が正装として着用した打掛、地質が縷子(縷子)他のものは晴着に略儀では縮緬地が使用され、賢人のしるしである団扇、武士の好んだ菖蒲(尚武)や菊の花束など武家特有の文様が刺繍された格式の高い打掛



なわち「子宝」に、梅は「生む」に通じ、すなわち「子供(竹)を生む(梅)事待つ(松)」子宝に恵まれ子孫繁栄を意味して婚礼衣装の文様に多く使われたのです。歌舞伎衣装に見る判事絵を思わせます。

また弊館所蔵の大名家の婚礼衣裳には、閑古鳥「諫鼓鶏」の文様の打掛があります。これは太鼓のまわりに鶏を配した文様で、閑古鳥が鳴くという商家では嫌がるお客様は居ない閑散としたいかにも

縁起の悪い文様に思われますが、元は中国の故事「諫鼓 苦むして鳥さわがず」からです。

すなわち「善政を行う王のもと、民が訴えを行う太鼓が使われず 苔が生え、その太鼓に鳥が巢を作る位、平和を

意味した」文様なのですが、これといった間にか商人には嫌われる「ひま」を意味した事になってしまったのです。また今でも結婚式の礼装である留袖には、宝船や南天の文様をよく見る事ができます。これは着用したその人の気持ちや文様に込められているのです。宝船は結

婚するお二人が荒波を乗り越え幸福になることを祈る気持ちであり、南天は何事にも難儀が転じて福となれという気持ちや言葉に出すのではなくその文様を見てもらう事によって表しているのです。この様にきものの文様には、ただ美しいだけでなく、それぞれの意味が込められているのです。そのきものの文様一点一点に、その当時の人々の思いを廻らして見るのもいいものです。

町方10
紫地滝に流水鼓文様友禅小袖



この衣裳は町方で着用された友禅染の小袖である。滝に鼓の文様は謡曲「鼓滝」の意匠化であり鼓は鳴る事から「鳴り上がる」「成り上がる」に通じ出世するを意味し町方で好まれた。

歌舞伎11
「鎌輪ぬ」文様



鎌輪奴(ぬ)：「かまわぬ」と読ませるしゃれで、明暦から元禄にかけて「町やっこ」の間で流行した衣服の文様。後に歌舞伎の七代目市川團十郎が採用し、再び文化年間に流行を見た。町民が武家階級に対する反発の意味。